

人の寄るところ鳥寄る雪解風

(『夜の客人』)

「雪解」は春先の季語である。田中裕明の愛した季語でもある。

掲句は、堅田浮御堂近辺での吟行即吟句。寄ってきた鳥は百合鷗である。観光客や近所の人からよくパンなどを貰うようで、湖岸に人が立つと「ぎゃあぎゃあ」と鳴きながら旋回する。けっこうな迫力でたじたじとしてしまうが、句からはそんな喧噪は想像できない。この作者が詠むと百合鷗もなにやら雅びになる。

句集には同日の吟行句が4句納められている。

人の寄るところ鳥寄る雪解風

春の水くぼみて浮御堂の影

堅田なる雛の眉のうすきこと

みづうみに添うて古町水草生ふ

「みづうみに添うて古町」は、かつて堅田湖族によってにぎわった湖岸の様子がやわらかく捉えられている。堅田本福寺で行われた句会には、珍しく背広姿であらわれた。「昼から会社を抜け出してきました」と笑って言って、皆を喜ばせた。この頃、すでに療養中の身で、会社ではそんな気ままも許されたのだろう。突然の参加は嬉しかったが、そのことが少し心配でもあった。